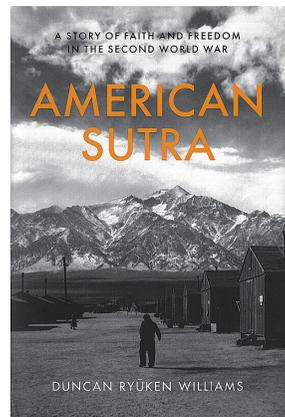


ダンカン・リュウケン・ウイリアムズ
『アメリカン・スートラ』

——第二次世界大戦における信念と自由の物語』

Duncan Ryuken Williams, *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*

小田 龍哉



Belknap Press (Harvard University Press), 2019

本書の著者、ダンカン・リュウケン・ウイリアムズ氏は、南カリフォルニア大学宗教学部前学部長であり、現在はUSC伊藤真穂日本宗教文化研究センター所長を務める、宗教学者・東アジア研究者である。ハーバード大学で宗教学の博士号を取得、著書に *The Other Side of Zen: A Social History of Soto Zen Buddhism in Tokugawa Japan* (Princeton University Press, 2005) があるほか、七冊の編著書がある。第二次世界大戦下の日系アメリカ人社会を仏教の観点から論じた本書は、『LAタイムズ』紙のノンフィクション部門ベストセラー第三位にランクインしたという（著者ホームページより）。

本書の構成は、以下のとおりである。

- プロローグ
1. アメリカ、宗教の自由の国？
 2. 戒厳令
 3. 包囲下の日系アメリカ人
 4. キャンプ・ダルマ
 5. 有刺鉄線の向こうのサンガ
 6. アメリカ仏教の再発明
 7. 仏教戦士たちの進軍
 8. 忠誠と徴兵
 9. ヨーロッパでの戦闘
 10. 再定住
- エピローグ

右の紹介や目次の雰囲気からもすぐに予測できるかもしれないが、本書はたんに学術書・研究書というのみにとどまらず、ノンフィクションとして読ませるストーリーテリングの要素もそなえている。日系アメリカ人が第二次大戦中に被った艱難辛苦の体験をモチーフとした書籍が、ともすれば読者の好奇心を煽ることに偏り、ノンフィクションの文体を纏う傾向にある問題については、吉田亮氏の指摘がある（同編『変容する「二世」の越境性』二〇二〇年）。ただし、本書に関しては、一〇〇ページ超におよぶ詳細な注釈などが物語っているように、そうした批判がそのままあてはまるわけではない。むしろ、学術書や研究書の作法にのっとってさえいけば、論者の視点の透明性が担保されるといった安直な思い込みのほうが、よほど疑ってかからなければならないことは言を俟たない。

『アメリカン・ストロア——第二次世界大戦における信念と自由の物語』というタイトルが示すとおり、本書は、大戦期における日系アメリカ移民の歴史を仏教という観点から論じた、人種的マイノリティ集団の歴史研究であるとともに、仏教という宗教が「アメリカ化」されてゆく過程を分析した宗教史研究でもある。『アメリカン・ストロア』は、ゆえに一方ではアメリカについての物語である。「……」だが同時に、『アメリカン・ストロア』は、他方ではアメリカにおける仏教についての物語でもある」と、著

者自身もこのようにプロローグのなかで言及している。

著者がまず注目をうながすのは、当時の日系移民のほとんどが仏教徒であったという事実である。そして、「第二次世界大戦中の日系アメリカ人の体験についての洞察に富んだ著作は数多くあるにもかかわらず、仏教は、その歴史のなかで無視されたままである」と問題提起がなされる。釈宗演（一八六〇—一九一九）に師事し、アメリカに渡って禅の道場『東漸禅窟』をひらいた千崎如幻（一八七六—一九五八）の詩、「別離」（一九四二年）の引用から本書は書き出されるが、その冒頭の“Thus Have I Heard”（如是我聞）という一節は、『アメリカン・ストロア』と銘打つ本書の、この上ない導入の役割をはたしている。学術的な問題関心に裏打ちされながらも、やはり、ノンフィクションとしてもすぐれて読ませる著作であるという本書の持ち味が、このあたりにも顔を覗かせている。

第1章では、日本の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が開戦し、大統領令九〇六六号が発令されるなか、国家安全保障の脅威として、仏教および神道のコミュニティ、さらに日本語学校が焦点化されたことが指摘される。第2章はハワイにおける強制収容について、第3章では、日系人をめぐる当時のアメリカ社会のヒステリー状況や、コミュニティの立ち退きにもなうさまざまな混乱・暴力が描かれる。アメリカの「敵」として日系人コミュニ

テイが人種化されてゆくにあたって、彼らが生き延びるためにとつた方法は各人各様であった。「日本」を彷彿させるすべてを捨て去っても仏教だけは手放さなかつた家族もあれば、仏教から差別待遇の比較的少なかつたキリスト教に宗旨替えする一群もみられた。

第4章から第6章にかけては、「アメリカにおける仏教についての物語」としての本書の側面が集中的に述べられ、全体をとおしての大きな山場となっている。第4章では、強制収容所内のおもに一世の仏教者たちの活動について、彼らが苛酷な環境なかでさまざまな工夫をこらしながら修行や行事をつづけたことが紹介される。著者は、強制収容が悲惨な体験である一方で彼らの信仰を強めるきっかけとなつた点を指摘し、仏教が説く、泥水に咲いた蓮の花のたとえにそれをなぞらえている。第5章は、教への受容側に比重を置いて叙述される。強制収容の直後は、多くの仏教徒が自分たちの信仰をあらかじめ実行することを躊躇しており、プロテスタントと比較しても礼拝の出席率が低かつたという。しかし、仏教が公に禁止されていたわけではないことがわかり当初のとまどいが消えると、多くの礼拝がおこなわれ、大勢が参加するようになった。

第6章では、仏教コミュニティが組織として当時の状況に適応していくさまが論じられる。言い換えればそれこそが、まさしく

仏教の「アメリカ化」であり、移民たちが日本から持ち込んだ教えの体系が「アメリカン・ストロ」へと変じてゆく諸相である。日本の本山との結びつきが断たれたなかで、ひとつには、仏教青年会（YBA）など若い世代の仏教者たちによる、アメリカナイズされた社会活動の取り組みや、収容所を訪れた白人仏教徒との連繋があつた。そうした動きは、宗派を超えたより普遍的な「アメリカ仏教」を志向するものであつたが、一方で、それまでの宗派の特徴を保持したいと考えた人びとも少なくなかつた。著者は、P・ナムリツチの言葉を借りつつ、「バラレルな信者たち」と彼らと呼んでいる。すなわち、仏教者たちはおなじ屋根の下に集いながら、それぞれ独立した教えをまもり、同時に、花祭りやお盆お彼岸などおもだつた仏教行事は合同で執りおこなつたのだつた。また、マンザナー収容所では仏教・キリスト教合同の慰霊塔が建立されるなど、宗教間の友好関係も模索された。やがて、日系人仏教コミュニティの指導者は一世から二世へと世代交代がなされ、たとえば浄土真宗本願寺派の米国仏教団では、英語が公用語となつた。

第7章から第9章では、日系アメリカ人の第二次世界大戦への従軍が描かれる。大戦中、兵役に就いた日系人の大多数が仏教徒であつたにもかかわらず、キリスト教徒のはたらきばかりが強調されてきたと著者は主張する。ヨーロッパ戦線での第一〇〇歩兵

大隊の活躍などはつとに知られるが、徴兵・志願兵ともに日系人兵士はさまざまな差別を受けた。また、戦況が激化し、負傷者や戦死者が増加するにつれて、彼らの精神面のケアや弔いの問題がクローズアップされてくる。兵士たちの認識票に記される宗教は、プロテスタント・カトリック・ユダヤ教・無宗教という別のみで、第四四二連隊に所属した仏教徒の認識票には、便宜上、プロテスタントを示す「P」が刻まれていたという（第9章）。

終戦を迎え、強制収容所が閉鎖されると、日系アメリカ人たちは解放される。第10章は、戦後のアメリカ社会への彼らの再定住について論じている。「多くの人たちにとって、収容所を去ることとはほろ苦い経験であった。彼らが築いてきた共同体は解散し、不確かな未来に向けて、それぞれの道を歩むことになったのだ」と著者はいう。彼らの再定住にあたっては、多くの反対や差別があった。銃撃、放火などの暴力事件も発生した。寺院は破壊され、盗難の被害を受けていたが、一時滞在のためのホステルの機能を果たせるなど、コミュニティ再建の拠点となっていく。同章ではまた、シカゴなど中西部のあらたな地への移住についても触れ、宗派を超えたアメリカ仏教の様相がさらに加速されたと評価している。

「アメリカについての物語」でもあり、「アメリカにおける仏教についての物語」でもあるというふたつの側面からのアプローチ

によって、本書は、日系アメリカ人にまつわる著述に分厚いハイモニーを持たせることに成功している。主旋律をなすのは前者の側面、アメリカン・ナショナルリズムの音階であろう。「宗教の自由」の理念との対照をつうじて日系移民が善きアメリカ人として自身をアイデンティファイしてゆくさまを二〇一九年というタイミングで描いた本書の意義とは、つまるところ、アメリカの理念そのものが大きく揺らいでいる昨今の時代背景と不可分のように見受けられる。

そして、「アメリカにおける仏教についての物語」という後者の側面も、一見、アメリカという世俗主義（的宗教）国家の理念にかしづく多様な「宗教」の一としての、仏教の主体化の物語のようにみえなくもない。そもそも仏教がきわめて柔軟に世俗権力との共存をはかってきた宗教であることは、東アジアの宗教史研究においてはむしろ自明のように思われる。しかし著者は、そこに多くの不協和音を投入している。たとえば、本書第5章や第6章のように受け手やコミュニティの観点から彼らの仏教をみたとき、それが、社会の趨勢と上手く距離をたもちながらマイノリティ集団が生き延びるための重要なツールとして機能していたニュアンスが浮かびあがってくるのである。

そのことは、エピローグでも象徴的に表現されている。そこで、ふたたび千崎如幻の詩が引かれ、「天と地とを指し、アメリカ

カは自由の国だと言おう」と賛美する一節で締めくくられる。ところが、ここにならんで紹介されているのは、経典の文字が書かれた大量の小石がハートマウンテン収容所跡から出土した、不思議なエピソードである。現在では、森祖道・箕輪顕量両氏によって丹念に検討され、それらがロサンゼルスの開教使・村北日鑑の手によって『法華経』の文字が書写された「一字一石経」であろうということが判明している。だがそれまで「ハートマウンテンの不思議な石」は、発見されてから四〇年以上にもわたって、なんだかよくわからない謎として放置されてきた。

一方には、自由や正義といった言葉で謳われ、奏でられる「理念」があり、他方には、その求心力を攪乱するような、とらえどころのないノイズが響いている。それら両者がどのような統合され、あるいは距離をたもちながら共存するのか。アメリカ文化とということでは、たとえば西洋音階とブルーノートとからなるゴスペル／ブルース音楽の伝統のごとく、そうした主旋律と不協和音との絶えざる緊張関係にこそ、本書の著者は「アメリカン・ストーリー」をしたたかに再発見しようとしているのではないかと感じられた。